

おーし、お前ら、席つけー！

スマホいじってんじゃねえぞ、そこのお前！俺の講義中はスマホか俺か、どっちが面白いかな勝負だからな。まあ、俺が勝つに決まってるが。

今日、俺たちがおもちゃにするのは、コイツだ！

（スクリーンに『善悪の彼岸』のタイトルページと序文が映し出される）

Jenseits von Gut und Böse.

Vorspiel einer Philosophie der Zukunft.

どうだ、このドイツ語の響き。まずタイトルがヤバいよな。「善悪の彼岸」。善とか悪とか、そんなケチなものの向こう側に行っちゃまおうぜ！って話だ。中二病心をくすぐられまくるだろ？俺も高校の時、このタイトルだけで3日はメシ食えたね。副題もいい。「未来の哲学への前奏曲」。これから始まるオーケストラはとんでもねえことになるぜ、っていう作曲家からの挑戦状だ。

この曲を作ったイカれたマエストロが、フリードリヒ・ニーチェ。

哲学者って聞くと、なんか白髪の好々爺が椅子に座って難しい顔してるイメージだろ？コイツは違う。口ひげモジャモジャの劇薬みたいな男だ。ハンマー片手に偶像（アイドル）を叩き壊すのが趣味なんだとよ。「神は死んだ」とかいうパワーワードで有名だよな。あれも元ネタはコイツだ。

そんなニーチェが、彼の哲学の集大成とも言えるこの『善悪の彼岸』の冒頭で、一体何を語り始めたのか。今日はこの「序文（Vorrede）」を、ネチネチと、骨の髄までしゃぶり尽くしていこうじゃねえか。心してついてこいよ。途中で脳みそが沸騰しても、俺は責任取らねえからな！

じゃあ、早速一行目から見ていこうか。

Vorausgesetzt, dass die Wahrheit ein Weib ist -, wie?

（仮に、真理が女であるとすれば――どうだろう？）

...は？

いきなりこれだぜ？お前ら、ポカンとしてるだろ。わかる。俺も最初読んだ時、「このおっさん、何言ってるんだ？」って思ったよ。哲学書だろ？普通さ、「世界の根源とは何か」とか「存在とは...」とか、そういうクソ真面目な話から始まると思うじゃん。なのにニーチェは「なあなあ、真理ってさ、女じゃね？」とか言い出すわけ。ナンパ師かよ。

でもな、ここにニーチェの凄まじい戦略が隠されてるんだ。落ち着いて考えろ。この一文だけで、二千年続いてきた西洋哲学の歴史全体を、ニーチェは盛大にディスってるんだよ。

ということか？続く文章を見てみよう。

ist der Verdacht nicht gegründet, dass alle Philosophen, sofern sie Dogmatiker waren, sich schlecht auf Weiber verstanden?

(独断論者であった限り、あらゆる哲学者は、女というものをわきまえていなかった、という疑いはもっともではないか？)

出たな、キーワード。「独断論者 (Dogmatiker)」。

ドグマってのは、「絶対に正しいと信じられている教え」のことだ。つまり独断論者ってのは、「この世界には、唯一絶対の、永遠不変の“真理”ってやつが、どっかに隠されているはずだ！俺様がそれを見つけてやるぜ！」って信じて疑わない、クソ真面目な哲学者たちのことだ。代表的なのが、古代ギリシャのプラトンだな。

ニーチェは言うんだよ。「そういう哲学者どもってさ、絶対オンナ心わかってねえよな」って。

どうだ、だんだん面白くなってきたろ？

哲学者が真理を追い求める姿を、ニーチェは「男が女を口説き落とそうとする姿」に喩えたんだ。

dass der schauerliche Ernst, die linkische Zudringlichkeit, mit der sie bisher auf die Wahrheit zuzugehen pflegten, ungeschickte und unschickliche Mittel waren, um gerade ein Frauenzimmer für sich einzunehmen?

(彼らがこれまで真理に近づこうとしてきた、あの恐ろしいほどの真面目さ、あの不器用な馴れ馴れしさは、一人のご婦人を口説き落とすためには、不器用で不作法なやり方ではなかったか？)

想像してみろよ。お前らが合コンに行ったとする。そこに、超絶マジメな哲学男がいたとしよう。彼は狙った女の子にこう言うんだ。

「お嬢さん、僕と君がカップルになることの論理的必然性について証明しよう。第一に、僕の遺伝子と君の遺伝子の組み合わせは生物学的に見て極めて優れており、第二に、僕が君を幸福にする確率は統計的に見て87.3%に達する。故に、我々は交際すべきである。Q.E.D. 証明終わり」

...どうだ？キモいだろう？秒でLINEブロックされる案件だろう？

ニーチェに言わせれば、プラトン以来の哲学者たちは、みんなこれと同じことを「真理」っていう名前の女性に対してやってきたってわけだ。**schauerliche Ernst** (恐ろしいほどの真面目さ)、**linkische Zudringlichkeit** (不器用な馴れ馴れしさ)。ユーモアもなけりや、アソビもない。ただひたすら自分の理屈を押し付けて、「俺の言うことが絶対正しいんだから、お前は俺のものになれ！」って、力づくで真理をモノにしようとしてきた。

そりゃ結果は決まってるよな。

Gewiss ist, dass sie sich nicht hat einnehmen lassen: - und jede Art Dogmatik steht heute mit betrübter und muthloser Haltung da. Wenn sie überhaupt noch steht!

(確かなことは、彼女が口説き落とされなかった、ということだ。——そして、あらゆる種類の独断論は今日、悲しげで意気消沈した姿で立っている。そもそも、まだ立っているらんの話だが！)

「真理ちゃん、俺に振り向いてくれませんでした...しょぼーん」。これが二千年間、哲学者たちがやってきたことの結末だと、ニーチェは笑い飛ばす。それどころか、「お前ら独断論なんてもうオワコンだろう？倒産寸前じゃねえか？」とまで煽る。痛快だよな。

じゃあ、なんでそんなクソ真面目な「独断論」なんてものが、二千年も哲学のメインストリームでいられたのか。ニーチェはその土台を暴きにかかる。ここからが本番だぞ、集中しろよ。

Ernstlich geredet, es giebt gute Gründe zu der Hoffnung, dass alles Dogmatisiren in der Philosophie, ... doch nur eine edle Kinderei und Anfängerei gewesen sein möge;

（真面目な話、哲学におけるあらゆる独断的な試みは、...高尚な子供の遊び、未熟な試みに過ぎなかったのかもしれない、と期待するだけの十分な理由があるのだ。）

「お前らが必死に積み上げてきた哲学体系って、実は壮大な砂の城だったんじゃない？」ってわけだ。じゃあ、その砂の城の土台、その「砂、とは一体何だったのか？ニーチェは三つの可能性を挙げる。これがめちゃくちゃ重要だ。

... irgend ein Volks-Aberglaube aus unvordenklicher Zeit (wie der Seelen-Aberglaube, der als Subjekt- und Ich-Aberglaube auch heute noch nicht aufgehört hat, Unfug zu stiften),

（...太古の昔からある民衆の迷信（例えば、魂という迷信。これは主語・自我という迷信として、今日でもなお害悪を流し続けているが）、）

一つ目は「民衆の迷信」。特に「魂（Seele）」とか「自我（Ich）」ってやつだ。

お前ら、普通に「俺」とか「私」って言葉使うだろ？自分の中に、何か中心になる、確固とした「自分」という存在がいるって信じてるよな。近代哲学の親玉デカルトなんて、「我思う、故に我あり」とか言って、この思考する「我」こそが全ての出発点だ！って宣言した。

でもニーチェは「それ、本当にあんの？」って疑うんだ。

なあ、考えてみるよ。お前らが「俺が考えた」って思ってること、それ本当にお前が考えたのか？もしかしたら、脳っていうコンピュータの中で、いろんなアプリ（思考、感情、記憶）が勝手に起動したりシャットダウンしたりしてるだけじゃないのか？そのOSの動き全体を、お前らは後から「俺」という名前と呼んでるだけじゃないのか？

「魂」とか「自我」というのは、原始人が雷を見て「雷様がお怒りだ！」って言ったのと大差ない、素朴な思い込み（Aberglaube）に過ぎないんじゃないか、ってニーチェは言うんだ。

この「主語・自我という迷信」は、この本の後半でめちゃくちゃ重要になるから、頭の片隅に置いとけよ。

二つ目の土台はこれだ。

irgend ein Wortspiel vielleicht, eine Verführung von Seiten der Grammatik her

（あるいは、何かの言葉遊び、文法による誘惑）

これもヤバイ。俺たちは言葉を使って考える。でも、その「言葉のルール（文法）」自体に、俺たちは無意識に騙されてるんじゃないか？って話だ。

例えば、英語でもドイツ語でも、多くの言語には「主語＋動詞」という構造があるよな。「鳥が飛ぶ』『私が考える」。

この文法に慣れ親しんでると、俺たちは自然とこう思っちゃう。「“飛ぶ”っていう行為があるからには、その行為をしている“鳥”っていう主体がいるはずだ』『“考える”っていう作用があるからには、その作用の主である“私”がいるはずだ』ってな。

でも、本当にそうか？「飛ぶ」という現象、そのものがあるだけじゃないのか？「考える」という思考の嵐が吹き荒れている、ただそれだけじゃないのか？
「雷が光る」って言うけど、「光る」という現象から独立した「雷」なんて実体はどこにもないだろ？「光る」という現象そのものを、俺たちは「雷」って呼んでるだけだ。
それと同じで、「考える」という現象の裏に、わざわざ「私」という犯人（主語）をでっち上げてるのは、お前らが使ってる言語の“罫、なんじゃないの？”ってニーチェは指摘する。俺たちの思考は、文法に支配されてるんだ。

そして三つ目。

oder eine verwegene Verallgemeinerung von sehr engen, sehr persönlichen, sehr menschlich-allzumenschlichen Thatsachen.
(あるいは、極めて狭く、個人的で、人間的あまりに人間的な事実の大胆な一般化。)

これが一番タチが悪い。要するに、「哲学者の個人的な願望の普遍化」だ。
プラトンは、この移ろいやすい現実世界が嫌いだった。だから、永遠不変の美しいイデア界っていう理想郷をでっち上げた。カントは、真面目で道徳的な人間だった。だから、誰にでも当てはまる普遍的な道徳法則（定言命法）ってやつを考え出した。
彼らは、自分の個人的な好みや体質、コンプレックスや願望を、さも「これが宇宙の真理だ！」みたいに大声で叫んでただけじゃないのか？
「俺、パクチー嫌いだから、パクチーは全人類にとって悪である！」って言ってるようなもんだ。痛いだろ？
ニーチェは『人間的、あまりに人間的』っていう、これまたすごいタイトルの本で、こういう偉大な思想家たちの“人間臭い、動機を徹底的に暴いてる。興味があったら読んでみる。

つまり、ニーチェに言わせれば、これまで「真理」とされてきた壮大な哲学体系なんてものは、

1. 「魂」みたいな原始的な迷信
 2. 「主語があるはずだ」みたいな文法の勘違い
 3. 哲学者の「こうだったらいいのにな〜」っていう個人的な願望
- っていう、超絶しょぼい土台の上に建てられた、ハリボテの城だったってわけだ。

じゃあ、そんなハリボテの城に価値はなかったのか？というと、ニーチェはそうは言わない。ここからがまた面白いんだ。

Die Philosophie der Dogmatiker war hoffentlich nur ein Versprechen über Jahrtausende hinweg: wie es in noch früherer Zeit die Astrologie war,
(独断論者の哲学は、数千年越しの約束に過ぎなかったと願いたい。それは、さらに昔の時代における占星術のようなものだった。)

独断論を「占星術」に喩えるんだ。

占星術なんて、今じゃ非科学的な迷信だって誰もが知ってるよな。でもな、昔の人々は星占いをするために、必死で星の動きを観測し、計算した。その膨大なデータの蓄積が、結果的に天文学っていう科学を生み出す土台になったんだ。
それに、エジプトのピラミッドとか見てみろよ。あれも王の魂が天に昇る、みたいな「超自然的な」信仰、つまり迷信から生まれた壮大な建築様式（den grossen Stil der Baukunst）だろ？

ニーチェはこう言うんだ。

Es scheint, dass alle grossen Dinge, um der Menschheit sich mit ewigen Forderungen in das Herz einzuschreiben, erst als ungeheure und furchteinflössende Fratzen über die Erde hinwandeln müssen:

(どうやら、すべての偉大な事物は、人類の心に永遠の要求を刻み込むためには、まず巨大で恐ろしい怪物として地上をさまよわなければならないようだ。)

独断論も、プラトン哲学も、キリスト教も、そういう「必要な怪物 (Fratze)」だったんだ、と。

それは間違いだったかもしれない。虚構だったかもしれない。でも、その「絶対的な真理があるはずだ！」という途方もない探求が、結果的に人間の精神を鍛え上げ、思考を深め、文化を豊かにしてきた。だから、**Seien wir nicht undankbar gegen sie** (それらに感謝しないではいけない) とまで言う。

単に過去をdisるだけじゃない。その功罪を冷静に見極めようとする、この複眼的な視点がニーチェのすごいところだ。

しかし、感謝はするが、許しはしない。ニーチェは、その怪物の中でも、最大最悪のボスキャラを名指しで批判する。

dass der schlimmste, langwierigste und gefährlichste aller Irrthümer bisher ein Dogmatiker-Irrthum gewesen ist, nämlich Plato's Erfindung vom reinen Geiste und vom Guten an sich.

(これまでで最悪、最も根深く、最も危険な誤謬は、独断論者の誤謬、すなわちプラトンによる純粹精神と善そのものの発明であった。)

出たな、ラスボス！プラトン！

プラトンの発明した「純粹精神」とか「善のイデア」ってやつ。つまり、この肉体とか感覚とかがある現実世界とは別に、清らかで永遠の真理の世界 (イデア界) があって、そこが本当の世界なんだ、っていう考え方だ。

なんでこれが「最悪で最も危険」なのか？ニーチェはこう喝破する。

Es hiess allerdings die Wahrheit auf den Kopf stellen und das Perspektivische, die Grundbedingung alles Lebens, selber verleugnen, so vom Geiste und vom Guten zu reden, wie Plato gethan hat;

(プラトンがやったように精神や善について語ることは、まさしく真理を逆立ちさせ、あらゆる生の根本条件である遠近法的なあり方を否定することだった。)

出た！超超超重要キーワード！「**das Perspektivische (遠近法的なあり方)**」！

これ、今日の講義で一番大事なとこだから、耳の穴かっぽじってよく聞けよ！

パースペクティブってのは、視点のことだ。

ここにリンゴが一つあるとする。俺から見たら赤い面が見える。お前から見たらヘタの部分が見える。虫から見たら巨大な建造物に見えるかもしれない。X線で見たら種が透けて見える。

どれが「本当のリンゴの姿」だ？

答えは「全部」だ。そして「どれも無い」。

どんなものも、必ず“ある視点から、見られた姿でしかありえない。神様みたいに、あらゆる視点を同時に持つ、なんてことは誰にもできねえんだ。これがパースペクティブ主義、ニーチェ哲学の根幹だ。真理は一つじゃない。無数の視点（パースペクティブ）があるだけだ。

プラトンがやったことは、この当たり前の事実の否定だ。彼は、俺やお前が見ているこの現実のリンゴを「偽物」だと言った。そして、どこか彼岸にある「リンゴのアイデア」こそが「本物」だと言った。つまり、俺たちの視点、肉体を持った生の視点を、価値の低いものとして切り捨てたんだ。これは「生（Leben）」そのものへの裏切りだとニーチェは激怒する。だから「真理を逆立ちさせた」んだよ。

ニーチェは医者のように問いかける。**"woher eine solche Krankheit an Plato?"**（プラトンという、古代が生んだ最も美しい植物に、なぜこのような病が生じたのか？）と。そして、その病原菌はソクラテスだったんじゃないか？とまで言う。

そして、このプラトンという「病」は、古代ギリシャだけで終わらなかった。二千年間にわたってヨーロッパを支配する、さらに巨大な怪物へと姿を変えるんだ。

Aber der Kampf gegen Plato, ... der Kampf gegen den christlich-kirchlichen Druck von Jahrtausenden - denn Christenthum ist Platonismus für's "Volk" - hat in Europa eine prachtvolle Spannung des Geistes geschaffen, wie sie auf Erden noch nicht da war:

（しかし、プラトンとの闘争、...数千年にわたるキリスト教的・教會的抑圧との闘争——なぜならキリスト教とは「民衆」のためのプラトン主義だからだ——は、ヨーロッパに、地上にかつてなかったほどの、壮大な精神の緊張を生み出した。）

ここ、テストに出るぞー！

「キリスト教とは“民衆”のためのプラトン主義である」。

プラトンの哲学は難解だ。でも、その基本構造——この世は仮の世界で、本当の世界は彼岸にある。肉体は卑しく、魂は気高い——は、キリスト教の教義とそっくりだろ？

アイデア界が「天国」になり、善のアイデアが「唯一神」になった。哲学が、大衆向けの宗教にバージョンアップ（あるいはダウングレード）されたんだ。

この「プラトン-キリスト教」という、二千年にわたる巨大なドグマが、ヨーロッパの精神を縛り付けてきた。でも、面白いことに、その強大な抑圧があったからこそ、それに反発しようとする力もまた、とてつもなく強くなった、とニーチェは言うんだ。

ここで出てくるのが、「弓の比喩」だ。

mit einem so gespannten Bogen kann man nunmehr nach den fernsten Zielen schiessen.

（これほど強く張られた弓を使えば、今や最も遠い目標を射ることができる。）

弓ってのは、強く引けば引くほど、つまり弦に「緊張（Spannung）」を与えれば与えるほど、矢を遠くに飛ばせるだろ？
二千年間のキリスト教による抑圧は、ヨーロッパ人の精神という弓を、ギリギリまで引き絞るようなもんだった。だからこそ、今、その束縛から解き放たれようとするとき、俺たちは人類がかつて目指したこともないような、遥か彼方の目標に向かって、新しい価値という矢を放つことができるんだ！
困難や苦悩は、乗り越えるべき障害であると同時に、俺たちをより高みへと押し上げるためのバネなんだ。このダイナミックな発想、これぞニーチェだ。痺れるだろ？

だがな、ほとんどの人間は、そんな「緊張」状態に耐えられない。苦しいからな。楽になりたい。だから、必死にその弓を緩めようとする。

und es ist schon zwei Mal im grossen Stile versucht worden, den Bogen abzuspannen, einmal durch den Jesuitismus, zum zweiten Mal durch die demokratische Aufklärung:

（そして、その弓を緩めようとする試みが、すでに二度、大々的に行われた。一度目はイエズス会によって、二度目は民主主義的啓蒙によってだ。）

イエズス会は、宗教改革で揺らいだカトリックの権威を再確立しようとした反動勢力。民主主義的啓蒙は、「神の前に万人は平等」から「法の下に万人は平等」へとスローガンを変え、誰もが同じような権利を持ち、同じように幸福になるべきだ、という考えを広めた。

ニーチェに言わせれば、どちらも「精神の緊張」を嫌い、人々を安易な答えや、ぬるま湯のような平等に閉じ込めようとする動きだ。特に、近代の民主主義とマスメディアへの批判は辛辣だぞ。

als welche mit Hilfe der Pressfreiheit und des Zeitunglesens es in der That erreichen dürfte, dass der Geist sich selbst nicht mehr so leicht als "Noth" empfindet!

（報道の自由と新聞購読の助けを借りて、精神がもはや自分自身を容易に「苦悩」とは感じなくなるように仕向けることに、実際成功するかもしれない！）

新聞読んで、テレビ見て、ネットニュース見て、みんなが言ってることと同じことを考えて安心する。そういう、思考停止した家畜のような人間を、民主主義は大量生産するんじゃないか？とニーチェは危惧したんだ。

そして、ドイツ人への強烈な皮肉！

(Die Deutschen haben das Pulver erfunden - alle Achtung! aber sie haben es wieder quitt gemacht - sie erfanden die Presse.)

（（ドイツ人は火薬を発明した——お見事！だが彼らはそれを帳消しにした——彼らは新聞印刷を発明したのだ。））

火薬が物理的に世界を破壊するなら、新聞は精神を均質化し、凡庸にすることで世界を破壊する、と。痛烈すぎるだろ。

じゃあ、どうすりゃいいんだ？ 周りがみんな、弓を緩めて、ぬるま湯に浸かって満足してる中で、俺たちはどう生きるべきなのか？

ここで、ニーチェは初めて、読者である俺たちに直接語りかけてくる。主語が **wir**（我々）になるんだ。

Aber wir, die wir weder Jesuiten, noch Demokraten, noch selbst Deutsche genug sind, wir guten Europäer und freien, sehr freien Geister - wir haben sie noch, die ganze Noth des Geistes und die ganze Spannung seines Bogens!

（だが我々、イエズス会士でもなく、民主主義者でもなく、十分なドイツ人でさえない我々、我々よきヨーロッパ人、そして自由な、極めて自由な精神は——我々はまだそれを持っている、精神のあらゆる苦悩と、その弓のあらゆる緊張を！）

どうだ？お前らに言ってるんだぞ。「お前は、安易な答えに満足する家畜か？それとも、この苦悩と緊張を引き受けてでも、まだ見ぬ目標を目指す“自由な精神”か？」って。

ニーチェは、この本を読むであろう未来の読者を、「自由な精神（freie Geister）」と呼ぶ。彼らは、特定の国や思想に縛られず、既存の価値観を疑い、孤独を恐れず、自らの足で真理を探究する、新しい貴族なんだ。

そして、序文は、この希望に満ちた、しかし謎めいた言葉で締めくくられる。

Und vielleicht auch den Pfeil, die Aufgabe, wer weiss? das Ziel.....

（そしておそらくは、矢も、課題も、誰が知ろうか？目標も.....）

俺たち「自由な精神」は、ギリギリまで引き絞られた弓を持っている。じゃあ、放つべき「矢」は？達成すべき「課題」は？そして、射抜くべき「目標」とは、一体何なんだ？その答えは、この先に書かれている。この『善悪の彼岸』という本そのものが、その矢であり、課題であり、目標なんだ。

.....はい、ここまで！

どうだ？脳みそ、沸騰したか？

ニーチェの序文は、ただのまえがきじゃねえ。これから始まる壮絶な哲学の、宣戦布告であり、招待状なんだ。

彼は、これまでの哲学が「真理は女だ」という前提からして、そのアプローチを間違えていたと指摘した。そして、その土台が「迷信『文法の罫』哲学者の願望」という脆いものだったことを暴いた。

だが、その間違いの歴史こそが、我々の精神という「弓」を強く張りつめさせ、今、我々「自由な精神」は、かつてないほど遠い目標を射抜く力を手に入れた。

これから俺たちは、ニーチェと一緒に、その弓を携えて、善と悪の彼岸へと旅に出る。常識という名の地図は役に立たねえ。頼りになるのは、お前自身の思考力だけだ。

来週は、第一章「哲学者の先入見について」に突っ込む。哲学者たちが、どんな「先入見」に囚われてきたのか、ニーチェがハンマー片手に片っ端からぶっ壊していくぞ。今日以上にヤバいことになるから、覚悟しとけよ！

じゃあ、今日の講義はここまで！しっかり復習しとけよ！お疲れさん！